



月刊 第583号

望郷の炎燃えて

東京寺泊会創立五十周年

二月の第一日曜日が東京寺泊会恒例の新年の集い、会場は芝パークホテル、この型が定着してからの位の年月が過ぎたろうか。確か石垣会長の時代で町白岩「おやじ」出身で世界料理

オリピックで優勝、帝国ホテルのチーフコックを経てパークホテルの役員になられた小黒さんのご縁での事と記憶する。私は田村会長の頃からのおつき合いで石垣、古川原、三上と



冬の張りつめた冷気の中、雪原の彼方の山から朝日がのぼる。村は朝もやの中。カメラは常に持参即シャッターオン。

東京寺泊会創立50周年記念大会



東京寺泊会創立50周年の記念会で挨拶する高橋町長。寺泊町最後の町長としての責任と抱負を情熱的に語った。(小林賢一郎さん提供)



寺泊から寺泊太鼓の14人のメンバーが参加、記念大会に花を添えた。勇壮な太鼓の音にふるさと冬の怒涛の海が偲ばれたであろうか。(広田勝さん提供)

四代の会長さん凡そ三十年近いことになる。そして今年で五十周年の記念会を迎えた。

地元寺泊からは高橋町長、石井議長、長谷川総務課長が来賓として出席、寺泊太鼓のメンバー十四名が特別出演、潮の香と松の音を会場一杯に溢れさせた。

祝辞の中で高橋町長は長岡市との合併のいきさつ、それに対する町長としての責任と将来への展望を熱く語られたが、後日町長さんにお逢いの折「いや、合併については東京の皆さんに随分きついご意見を頂き、詰問と言った方がいい程の強い意見もありましたね」とのこと。

東京寺泊会が半世紀にわたって燃えつつづけているのはまさに望郷の炎によるものなのですか

ら長岡市との合併と言えば先ず「ふるさと寺泊がなくなる」との危機感でしよから強烈な意見が出てくるのは当然のことだろうと思います。私は「ふるさと」とは「寺泊町」とか「長岡市寺泊」とかでどうかなってしまふようなものではないように思います。例えば東京からの帰省でトンネルを越えた時からふるさとが見えはじめ長岡駅でバスに乗り窓から弥彦山の姿が見えた途端ふるさとの中にいる。弥彦も岩室も出雲崎も佐渡も分水の桜もみんなふるさとである。コシヒカリ新米の味もタラの煮付けの煮凝りも地酒の味も、お祭りも盆の墓参りも同級会も寺泊おけさも佐渡おけさもみんな「ふるさと」ではないのかと思う。

行政区でのとらえ方で言えば寺泊の成立はいつの村制になるのだから「郡区町村編制法」に公布され、三島郡役所が与板に開庁され先ず松沢町から湊町までに白岩村を加えての現町が成立、後に野積村が加わって十二町二村の寺泊大町が成立するも戸長(今の町長)のなり手がなく四転五転、郡長の説諭、辞令発行によりようやく上林津三郎氏が就任請書を提出、当時の町長が戸数約二〇〇〇戸、人口六千程で県下でも大規模町村(全県平均人口九〇〇、戸数一八〇)であった。以来一、二〇年余の寺泊町の幕が降りるのだが昭和三十三年大河津との合併も思い合

海雲山西生寺に詣で感有り

懸涯声を呑む雲水の果て
遙かに浮ぶ漁舟海峽青し
弥彦 米山 椎谷崎
遠く望めば白光加賀の峰
扇葉風に散る公孫樹
法印の巨像石を踏み立て立つ
赤坂の主は誰ぞ松籟の音
即身成佛 今願在
（原文七言絶句漢詩体）
平成十七年酉年杓月大寒
野積住人 井木詠山謹作

『好色一代男』(三)

さとうのぶひと

井原西鶴『好色一代男』に載った「越後寺泊遊女の事」、続けます。



寒行の列が雪の街を行く。法福寺檀家講中の有志。
今年から寺の若さんも加わりウチワ太鼓、題目もひときわ高らか。



節分の豆撒き、今年は2月3日。撒く豆も大豆から殻付きの南京豆やアメ、チョコなど今様になった。この家では孫達も豆撒き、ジジババが鬼の役割。



鱈の手節である。
タラと言えば本来マダラを指すらしい。
昆布メ、煮付、とぶ汁と冬の味覚の代表である。

「ここでの人ごろし小金といふ約束して、揚屋という事もなく、親方七郎太夫が内に、新しき薄緑敷きし奥の間に、やさしくも屏風引廻してありける」
世之介は、寺泊の廓で男殺しと呼ばれる小金という遊女を揚げる約束をします。しかし寺泊には揚屋がありません。小金の抱え主、七郎太夫の家の薄緑を敷いた奥の間に、簡単に屏風が引きまわしてあります。

遊里では普通、遊女屋（置屋）から揚屋に遊女を呼んで遊ぶものでした。「揚屋入り」といって、遊女は置屋から供を引き連れ、盛装に高下駄をはいて八文字をふみ、華美な行列を仕立てて揚屋に入ったといわれています。寺泊の廓に揚屋はありません。

抱え主の七郎太夫の家で、しかも畳のない、板の間に薄緑を敷いた部屋でした。
亭主が膳を運んできました。蓋をとってみるに小豆飯が盛ってあります。この時節に小豆飯とは？「これはおもしろい」と世之介は思います。
「鯖きざみて穂菱置合すこそ心にくしと思へば、湯を呑むまで終に香の物を出さずすませ」
魚の豊富な寺泊です。鯖の刺身でしよるか、夏場ですので酔って締めたいものかもしれません。植物の蓼の穂が付け合わせてあります。なかなか気が利いてると思つて、飯が済んで湯を飲む時まで、とうとう香の物が出さずすまいました。

小金は箸も取らず行儀よくし、遊女の小金といい、抱え主の七郎太夫といい、上方から遙か遠い越後寺泊の遊里は、世之介の期待に添うまでに洗練されていませんでした。江戸吉原で初代の「高尾」に三十五回もふられた記憶が甦り、世之介は、「この女がその太夫にてこれ程自由になれば、もっともおもしろかるまし」
と呟きます。高尾は、京都の吉野太夫、大坂の夕霧太夫と並び称される、江戸を代表する遊女でした。高尾をものにできなかった悔しさを思い出し、世之介は「今から帰る」と案内してくれた出雲崎の船宿の亭主に祝儀を頼みます。
遊女の揚げ代、銀五匁のほかに、銭六匁文を祝儀としてばらまきました。遊女たちは「さては大気な大臣」と驚き、船着き場まで見送りに来ました。船に乗り際、小金が、
「こなたは日本の地に居ぬ人ぢや」



東京寺泊会・創立50周年記念大会

平成17年2月6日 於 芝パークホテル

今年は創立50周年と言うことで新しいメンバーが多数参加された。町からは町長、議長、総務課長、又東京新潟県人会、首都圏西蒲原会、分會会、弥彦会の代表が来賓として出席。

毎年同期クラス10名以上が出席する年代もあり、同級会の時など積極的な宣伝勧誘活動も必要のようだ。

集まれば即ふるさとの話に花が咲く。

と謎めいた言葉を囁きます。世之介は、気にかかっているけれどもいまだその意味が判らない、と言っています。

『好色一代男』の結末は、色道三昧の暮らしを断るため六人の者を誘って「女護の島」への船出でした。従って、巻三、第五章の「佐渡が島」というプロットは、結末を導く重要な伏線になっていました。

越後寺泊の遊女、小金の「あなたはこの狭い日本の土地に居つかぬお方じゃ」という謎めいた言葉がここでははっきりします。すなわち「女護の島」へ船出することは、海のむこうの楽園を求めて日本を脱出することだったので。少なくとも西鶴はそのような構想を持ち、欲望の無限性に制御を加えたように思われます。

西鶴は佐渡の情報をはとんど持っていませんでした。次章で「その冬は佐渡が島にも世を渡る船なく」とあるだけです。世之介は佐渡へ行くことは行つたのですが、そこに世渡りの伝手はなく、すぐ出雲崎に戻ります。先だって世話になった船宿の亭主に頼み、魚売りとなつて北国の山々を行商しながら、再び色道修行の旅を続けることになりました。

井原西鶴『好色一代男』に載つた「越後寺泊遊女の事」は、ストーリーを完成させる上で重要な位置を占めていることは間違いないありません。(青柳清作『寺泊の歴史』寺泊町公民館、19

61。日本古典文学全集38『井原西鶴集一』小学館、1974)

誌代御後援(敬称略・順不同)

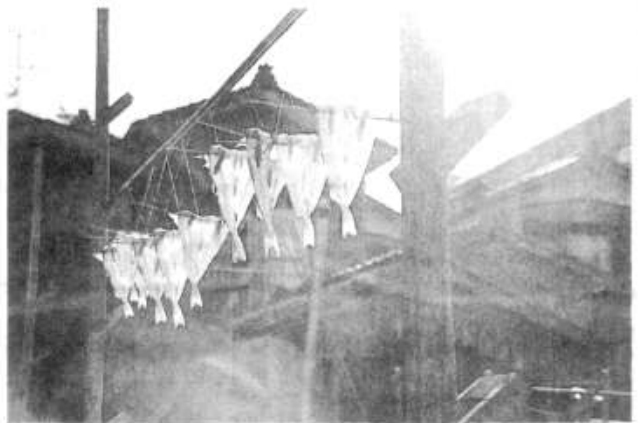
- | | | | | | |
|---------|-------|------|---------|--------|------|
| 東京都 | 小形 美代 | 金三千元 | 埼玉県 | 栗山 セツ子 | 金五千元 |
| 大森 芳子 | 金三千元 | 市川市 | 向田 美知 | 金三千元 | |
| 小泉 栄美子 | 金三千元 | 藤沢市 | 藤田 宇宙治 | 金五千元 | |
| 小林 艶子 | 金三千元 | 横浜市 | 梅沢 正巳 | 金三千元 | |
| 神田 恰子 | 金三千元 | 横濱市 | 小田 正巳 | 金五千元 | |
| 古瀬 和子 | 金三千元 | 新潟市 | 小田 野清 | 金三千元 | |
| 三上 喜久治 | 金一万元 | 新潟市 | 天野 吉司 | 金三千元 | |
| 松井 繁男 | 金五千元 | 新潟市 | 外山 スイ | 金五千元 | |
| 石川 勇一 | 金五千元 | 新潟市 | 長谷川 昭二 | 金五千元 | |
| 田中 桂子 | 金三千元 | 新潟市 | 岡田 屋具服店 | 金三千元 | |
| 越智 綾子 | 金三千元 | 新潟市 | 平石 義孝 | 金三千元 | |
| 滝沢 初江 | 金三千元 | 新潟市 | 西山 孝 | 金五千元 | |
| 笹平 京子 | 金三千元 | 新潟市 | 高橋 医院 | 金五千元 | |
| 渡辺 賢一 | 金一万元 | 新潟市 | 志田 嘉一郎 | 金三千元 | |
| 内山 清 | 金五千元 | 新潟市 | 納谷 キッパ | 金五千元 | |
| 渡部 作次 | 金五千元 | 新潟市 | 小島 平弥 | 金三千元 | |
| 下島 作次 | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 田中 澄江 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 廣田 勝 | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 江森 タイ | 金一万元 | 新潟市 | | | |
| 藤田 美知 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 向田 美知 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 藤田 宇宙治 | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 梅沢 正巳 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 小田 正巳 | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 小田 野清 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 天野 吉司 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 外山 スイ | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 長谷川 昭二 | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 岡田 屋具服店 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 平石 義孝 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 西山 孝 | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 高橋 医院 | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 志田 嘉一郎 | 金三千元 | 新潟市 | | | |
| 納谷 キッパ | 金五千元 | 新潟市 | | | |
| 小島 平弥 | 金三千元 | 新潟市 | | | |



寺泊から間瀬を過ぎ角田に向う海岸道路にこんな岩がある。私は海鶴の岩と呼んでいるのだが、寒風の中激動だにせず天辺にいつも鶴がとまっている。



野積の北のはずれに一筋の滝がある。牛のしょんべんと有難くない呼ばれ方をしているのだが、冬が一番美しい。



冬の寒風と日光が干物の味を一段と美味しくしてくれる。不思議な自然の作用である。これからはカレイの季節となる。

寺泊町	小岩井孝三	金三千元
〃	河合万之丈	金五千元
〃	鳴海 忠夫	金三千元
〃	井木 清	金三千元
〃	聖 明 寺	金一万元
〃	石塚 哲夫	金五千元
〃	桑原 亮平	金五千元
〃	後藤 ハツ	金三千元
〃	分水町 幸子	金三千元
〃	東京都 鈴木 高	金五千元

小波会二月句会詠草

兼題 大寒・鱈他当季

大寒や シベリヤおろし裏戸打つ

大寒の 汁粉程よき甘さかな

小島 温石

加勢 白汀

大寒の 月は薨の波洗ふ

小島 冬扇

大寒や 衰服に残る座り敷

小形 美代

大腕に 熱き鱈汁なみなみと

齊藤 紫苑

競声の 響く釣先孕み鱈

能登 頑牛

地の鱈の 煮付と汁で娘を迎え

江原 汀子

鱈を割く 出刃の握りの確かなる

中村 流颯

地震の地に 鱈汁つくる漁師の背

竹内 霍山

鱈腹の 腹艶艶と鏡りを待ち

大越碧水子

大喰ひは 罪か鮫鱈の吊し斬り

内藤 蓮子

寒の水 飲みて抑える腹の虫

外山きよし

喜捨拒むごと 足早の寒行僧

外山 海子

俳壇に 君の無事知る春浅し

水沢 蕉子

あとがき

長岡市との合併への動きが時間を読みながら急速に進んでいる。長岡市にとって寺泊は海、港、漁業、観光（佐渡へのアクセスも含め）等々将来の町づくりに魅力的な地域である。保険センターの建設や少子化対策、子育て支援の拠点として竹森保育園の改築なども具体的な計画に入っていると聞く。

寺泊には酒蔵がないので新鮮な魚とのセットとなる「どぶろく特区」などどうなのだろうか。幸い宮尾登美子さんの「蔵」で杜氏の里としての宣伝は充分、而も定年で腕前のいい杜氏さんはじめその道の専門家は沢山おいでだ。酒造り唄も伝承されて

いる。これだけの条件が揃っているのをねかせておく手はないと思うのだがどうだろうか。古い民家でも改修して、水だつて野積の山には名水が湧く。「どぶろく蔵」は町への私のささやかな夢。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

発行所 ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二八九番

振替番号 〇〇六二〇三三五四五

印刷所 吉野印刷株式会社